

南方徴用文学研究 : 戦後における南方表象の問題を 中心に

尹, 小娟

<https://hdl.handle.net/2324/2236323>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏名：尹 小娟

論文名：南方徴用文学研究——戦後における南方表象の問題を中心に

区分：甲

本論文の目的は、昭和十年代の日本占領下における南方徴用文学を対象とし、従来の研究で看過されてきた戦後表象について考察することにある。〈南方徴用文学の戦後〉を閑却する姿勢には、少なくとも二つの問題がある。ひとつは、戦後になって改稿・改作されたテキストとの偏差から「戦時下の徴用文学」テキストの襞が見いだされる事例があること。もうひとつは、改作・改稿が見られない場合でも、その改作・改稿しないという態度や「戦時下の徴用文学」に対する姿勢や発言、さらには徴用体験を反映した創作などから、各作家にとって「徴用文学」が持つ意味や戦後の創作において「徴用文学」が果たした機能を観測することが可能になることである。

こうした問題意識から、本論文では「陸軍報道班員」「海軍報道班員」「占領地視察」の三部構成として、それぞれ二人の作家を対象に、戦時下と戦後の作品を取り上げて考察した。以下、各章の内容を簡潔にまとめる。

第一章では北原武夫を取り上げた。北原が徴用中に感じた「想念」に注目し、小説「カリオランの薔薇」の戦中版と戦後版における改作について考察した。戦前版では女の好意といった不透明な印象しか残さなかったが、加筆によって「薔薇」が赤ん坊と女の影を揺曳させることになった。さらに、戦後版では「私」が内地で女と子供を捨てた私密的な過去についても加筆している。これら二つの加筆は、北原の戦時下の文学論「薔薇について」を受け継ぐ一方で、それを破産させてもいる。この「破れ」ができたからこそ、戦後版「カリオランの薔薇」は北原が「戦争文学論」で主張する、読者を「考えさせる」ものになったといえる。

第二章では阿部知二を取り上げた。「猿踊」という題材について戦前版と戦後版を比較することを通して、日本人はバリ島現地人との間に同じ「東洋の心」を持つという阿部の主張が、戦中戦後を問わず一貫して見られることを確認した。さらには、村の外ではみすぼらしい猿のような現地人の男が村で生き生きと踊る対照的な光景や、密林で溶け合うジャワのすべての生物とそこで疎外される主人公の夢の描写に、「東洋の心」があっても日本人はあくまでも外来の侵入者であるという阿部の反省の姿勢が表れていることを指摘した。『火の島』や「死の花」に見られるジャワ文化への興味、オランダ人学者の保護、そして現地人文化の尊重は、阿部が強調する文学における「不動のヒューマニテ」の具体的実践であるといえる。

第三章では海野十三を取り上げた。徴用前の海野は愛国者と科学者の二つの〈顔〉を持っていたが、南方前線でアメリカの新兵器を目の当たりにし、日本の科学力不足の現実を心の底から認めざるを得なくなったことで、科学者と愛国者という二つの立場が分裂していった。戦後、海野は徴用中に捨てた科学者の〈顔〉を取り戻し、科学技術の普及と科学小説の執筆を続けた。「火星兵団」「地球発狂事件」「火星探検」といった作品を通して、海野が描

く地球外知的生命は戦前の「敵」から戦後の「友人」へと変化していった。

第四章では久生十蘭を取り上げた。十蘭の南方作品には、一般的な徴用作品に見られる「戦争の悲痛」がほとんど見られない代わりに、前線の兵士たちとその生活をユーモア溢れる筆致で描いている。さらに、戦後行われた「内地へよろしく」から「風流旅情記」への改作で、語り手の介在によって戦場の残酷さや感傷性を対象化させ、戦時色の強い小説を主人公ひとりの「風流」な旅行記に書き直したことを指摘した。

第五章では林芙美子を取り上げた。林の戦後作品に見られる「自然と人間がたはむれ」る楽園としての南方イメージと南方体験がもたらす不安という二面性の内実について、「ボルネオ・ダイヤ」「麗しき脊髄」「荒野の虹」「浮雲」の分析を通して考察した。この不安は戦後まで続き、日本に居場所のない虚無感や戦没者に対する罪悪感へと変容していくことを明らかにした。戦争が終わり、多くの作家が明るい未来に思いを馳せ、また、戦前と戦後の大きな断絶に喪失を感じているときに、時代の明るさに背を向け、喪失感に浸ることなく、戦没者・引揚者・戦争未亡人などの社会の底辺で生きる庶民の生活に目を向ける林の姿を浮かび上がらせた。

第六章では佐多稲子を取り上げた。佐多の戦地慰問は1941年の中国慰問から始まったが、佐多自身がそれを「戦争協力」と意識しはじめたのは南方慰問時であった。また佐多の女性解放思想も、南方慰問を経て、国家総動員法に巻き込まれる形で大きく変容した。佐多はプロレタリア作家であったため、戦地慰問に対する戦争責任の追求から逃れることはできなかった。「虚偽」「泡沫の記録」及び戦後のエッセイから、敗戦直後の佐多は自らの戦地慰問を振り返っているが、民衆に対する「罪の意識」より左翼仲間に対する「恥の意識」の方が強かったことが窺える。

南方徴用体験を戦時下の出来事としてのみ捉えることは、南方徴用文学研究を矮小化することにつながりかねない。それゆえ、本論文では南方徴用体験が戦後に与えた影響まで視野を拡大した。この六人の作家の文学的営為は決して画一的には論じることのできない広がりを持っている。〈南方徴用体験の戦後〉をめぐる言説とその問題系は、作家研究の領域にとどまらず、昭和文学史を検討する際の新たな視点を提示しているといえる。